白虎隊
飯盛山での自刃

「白虎隊奮戦之図」飯沼家蔵
右が土佐。左が白虎隊の篠田隊。
篠田は立って指揮をしています。
倒れている者は死去したか、けがをした者。両軍とも同じ黒の洋装。

「飯盛山自刃之図」飯沼家蔵
この図に描かれている人数は16人。
「城は落城していなかった」
すべて黒の洋装。

飯沼貞吉の『白虎隊顛末記』などによると、一八六八年八月二十二日夜十頃、日向隊長が敢死隊に用があると篠田に告げ出かけたが戻らない。

二十三日、早朝、少し雨、西軍の主力部隊は、朝三時に猪苗代を出発。板垣退助指揮のもと土佐を先頭に、大垣、大村、長州、佐土原、薩摩の順に進む。戸ノ口原の両軍は、雨の中、一晩中篝火（かがりび）を焚きます。篠田小隊長は、朝五時に「気を付け」の号令を発し、十七人の人員点呼後、ただちに「進め」の号令を発します。進むと戸ノ口付近より銃声が間近に聞こえ、水の無い水路に潜伏します。溝の幅は五・六尺、土手の高さは二・三尺。

朝六時頃、西軍は、街道を進み、白虎隊まで約百メートルに近づくと、白虎隊は側面から篠田小隊長の「撃て」の号令で一斉射撃を開始。西軍は、初め狼狽しましたが、しばらくして、弾丸が飛来すること雨のごとしとなります。銃身が熱くなり、手に持つことができなくなるほど発射。ここで、篠田隊長は、刀を振りかざし、指揮。中には弾にあたり介錯を頼む者がいました。池上新太郎、伊東悌次郎、津田捨蔵の三人が戦死。ケガする者も。他の原田、山内隊は統率がとれてなく、前日の大雨となっていた新堀（新四郎堀）に身を隠しました。退却命令が出たので、篠田隊は篠田を最後に溝を出ます。一旦最初の野営地菰土山へ戻りそこで、山内隊の石田和助、伊藤俊彦が篠田隊に合流し一六人となります。そして会津藩の野営地、八幡山に行くと誰もいませんでした。のちに、山内隊の石山虎之助が篠田隊を追います。山内隊と原田隊は、若松城を目指し背炙り方面に。原田隊四人は、空腹を満たすためキノコ小屋で松茸を煮て食べます。そして、東山の愛宕山へ下り、城が火に包まれていたので、自刃しようとしたが、敢死隊にいさめられ、城へ戻ります。山内隊も城を目指します。篠田隊は戸ノ口から退却し城を目指します。途中点呼し人員一六人を確認。隊士の中には、腰に残飯多少持っている者がいて、それを出し合い、石地蔵の前にある窪石入れ、水を入れて混ぜ、交互にみなで手ですくって食べます。山を下り進むと、滝沢街道に出ます。九時頃滝沢街道を進む幾多の兵を見かけ、敵か味方かを試すため合言葉を掛けると銃が向けられ、撃ち出し、南の飯盛山へ逃げます。永瀬雄治が股を撃たれたので山頂を目指すのは止めて、戸ノ口堰洞門に入り、飯盛山を目指します。洞門を出ると、弁天堂で休息し、上を目指し滝沢の墓より上にある自刃の地にたどりついたのは一〇時頃。ここで、野村駒四郎が「敵を衝くか、井深茂太郎が蒲生氏郷の築いた名城なので城落ちることは無いとして、城へ戻り戦うか」といい、互いに激論を交わす。篠田儀三郎が、「策の講ずべきなし、城に入るは不可能ではないが、誤って敵に捕まり、捕虜となったら上は君に対し、面目あるや。下は祖先に対し何の申し訳やある。潔くここに自刃し、武士の本分を明にする。」として、議論定まり、一同鶴ヶ城を見て、自刃となります。

明治四年　青森県の斗南に白虎隊十六士が改装されます。
明治七年　墓標が妙国寺から飯盛山に改装されます。
明治十七年　十六士墓が建立。剣舞を奉納。
明治二十三年　墓が整備され十九士となります。
大正十五年　飯盛山が山川健次郎の努力により整備されます。
昭和三年　ローマから記念碑が贈られ除幕式となります。
昭和十二年　ドイツから記念碑が贈られます。

図・写真・文 ©石田明夫2017 問合せ TEL・Fax 0242-24-3423 090-1378-8087
メール・ホームページ「考古学から見た会津の歴史」で検索